

挽歌

昭和二十八年三月十二日午後七時四十二分、大阪国立病院長野分院で、伊東静雄さんが死んだ。しかし、私とその死を知ったのは、それから半月も経った三月二十七日、三瓶山登攀のために乗った汽車の中であった。朝八時に広島を発った汽車は、山峡の村々を東北方に縫って上っていった。隣席に坐っていたK君が、「これ御覧になりましたか」といって示すその朝の『毎日新聞』で、はじめてそれを知った。それは桑原武夫氏の筆になる追悼文であったが、そこには、死の日は全然しるされてなかった。やむをえないことではあるが、私は今まで知らなかった自分の迂濶を悔いた。何か不満のような感情も頭を上げた。それにしても、死の日時がわからないことは、車中ではそれを確かめるすべもないだけに、妙にいらいらした気持になっていった。

桑原氏の追悼の文章は、詩人の死をいたむ熱い思いに貫かれていたが、私には、そのあとに併載されてあった「倦んだ病人」という、伊東さんの近作の詩の方が、その「死」をもっともよく

語っていてくれるように思った。「倦んだ病人」は、伊東さんみずからの手で書かれた死亡通知であった。

今年私が出した年賀状の返事に、夫人の代筆らしく、「去年の暮からいくらか良くなりつつあるやうで、たのしんでをります」とあり、つづけて、「二月号の文芸春秋に短詩を書きました、こんな日がつづくとうろしいですが——」ともあった。

長い療養生活

せんにひどく容態が悪かったころ。

深夜にふと目がさめた。私はカーテンの左のはづれから

白く輝く月につよく見つめられてゐたのだった。

またさめる。矢張りゐた。今度は右の端に。

だいぶ明け方近い黄色味を帯びてやさしくクスンと笑った。

クスンと私も笑ふと不意に涙がほとばしり出た。

『文芸春秋』に載ったこの詩を、伊東さんは、「大変よく出来た」と「自慢」していたと、最近の夫人の手紙にあった。「之をよんでもらへば、伊東がどうしてゐるか、自分の事を心配して下さってゐる人にわかつてもらって、いいねえ」とも、洩らしていたという。夫人の同じ手紙の

中に、三年五カ月の療養生活は、やはり苦しかったと見えて、詩作も稀で、この「長い療養生活」と『毎日』に載った「倦んだ病人」の二編だけだったとも書いてあった。二編の詩の制作の先後は、私にはわからないが、去年の暮れから今年にかけて小康を得たという、あの時期に「倦んだ病人」の方も、書かれたのであろう。この二編によって、伊東さんは、その友人たちへ最後の挨拶をすませ、同時にそれが、悲しくもみずから認めた死亡通知ともなったのである。

昭和二十四年の夏、東京からの帰途大阪に下車して、黒山村の宅を訪れた。戦争の末期から音信が絶えていたが、直接会ったのはもっと久し振りである。伊東さんも三国ヶ丘の家を焼夷弾で焼かれ、今の家に移ったまま、そこに住んでいたのである。庭の板垣に沿った狭い植込の草花を見やりながら、伊東さんは、伊東さんらしい言い方で「四十代の挫折」ということをいい、われわれ世代の共通の悲しみを語りあったことであった。そのころ、すでに伊東さんは病魔に犯されていたわけである。

伊東さんと知り合ったのは、昭和十一年の、たしか夏だったと思う。当時堺に住んでいた栗山理一の宅であった。その頃は池田勉も住吉区に住み、まだ台湾にいた蓮田善明もはるばる来合わせ、われわれ同人四人との最初の出会いであった。少量の酒で楽しくなり、朔太郎の「晩秋」の詩や、『わがひとと与ふる哀歌』の中の自作の詩を朗読したりした。自作の詩の方は忘れたが、

歌

挽

「晩秋」の方は、その冒頭の「汽車は高架を走り行き……」のあたりの詩句とリズムが、大層鮮

明に今でも蘇ってくる。そしてその口を衝いて出てくる文学論は、すべて私の驚きであった。私は伊東さんから文学者の厳しい生き方を教えられ、人生における「誠実」の尊さを教えられた。昭和十年に出版された第一詩集『わがひとに与ふる哀歌』を贈られたとき、伊東さんは、その扉にこんな言葉を書きつけてくれた。

われは見ず

み空の青に堪へたる鳥を

同じ詩集に入る「漂泊」と題する詩の一句であるが、私はこの詩句から、古典の正確な読み方を教えられた。後年、われわれ四人が国文学雑誌『文芸文化』の刊行を発意したのも、伊東さんとわれわれとのかつての日の結縁が、一つの有力な動因となっているように、私には思われる。伊東さんは、われわれにとって発光体であった。私は、たとい数行の短文でも、伊東さんの眼を意識しないでは書けなくなった。その批評は、痛いほど正確に応えた。伊東さんの存在が、私に勇気を与えつづけた。『わがひとに与ふる哀歌』所収の同名の題の詩に、

かく誘ふものの何であらうとも

私たちの内の

誘はるる清らかさを私は信ずる

という一節がある。過日、映画「ひめゆりの塔」を見ながら、ふと心にこの詩句が蘇った。壕内の仮式場で挙げられた卒業式の場面や、死を前にして乙女たちが水辺で髪を梳る所や、最後に海岸の岩かげに点々と横たわる白花のように清らかなその死骸や、そんな所では、ほとぼしるように涙が流れた。物事をただ結果のみから評価しようとする人を私は憎む。敗戦という悲しい結果から推して、乙女たちの清らかな献身を疑う人があるであろうか。また乙女たちを誘ったものかたとい何であろうとも、彼女たちの内なる、それに誘われる清らかさが尊いのでないか。——このような考え方を私の私の傾向に、みずから反省を加えるたびに、私に自信と勇気を与えてくれるのは、常に伊東さんのこの詩句であった。

三瓶山のある島根県へ越える赤名峠の道は、雪解けの名残りで、ぬかるんだ。バスは、上下動だけでなく、船のように横振れも大きく来た。私は震動の激しい車窓から、峠道の縁に叢生する熊笹の葉のそよぎを見ながら、ただ無性に悲しかった。昨年夏、長野分院に見舞ったとき、病室を出てくる私の姿を、執拗に追い求めた伊東さんの眼差しが、眼底にありありと蘇ってくる。

三瓶の残雪は深かった。頂上に登った日は、その上に猛吹雪に襲われた。私は吹雪に抗して、狂暴に、視界を奪われた雪原をひた走りに走った。「連嶺の夢想よ！汝が白雪を消さずあれ」という、伊東さんの詩句を吟みながら——。

(昭和二十八年七月)